

聖書：使徒 5：33～42

説教題：はずかしめられるに値する者

日時：2013年8月4日

使徒たちがサンヘドリンで尋問されている場面の続きです。先にペテロとヨハネが逮捕された時も、議会のメンバーから、二度とイエスの名によって語ったり教えるはならないと命じられました。しかし使徒たちは語るのをやめませんでした。そして多くの人々がこれに聞き、信じる人が益々増える状況にありました。そこでサドカイ派の人たちがねたみに燃えて使徒たちを捕らえたのです。そんな議会のメンバーを前にして、ペテロたちは同じ言葉を繰り返します。すなわち「人に従うより、神に従うべきです」(29節)と。そしてほとんど説教とも言えるような弁明をそこでしました。

これを聞いてサンヘドリンのメンバーは怒り狂い、使徒たちを殺そうとします。「怒り狂う」という言葉にはしるしがついていて、欄外を見ると直訳で「心をのこぎりで引き切る」とあります。彼らは使徒たちの答弁を聞いて、もはや自分で自分をコントロールできないほどに怒りが爆発します。はらわたが煮え繰り返り、今すぐにも使徒たちを殺してやろう、という状況でした。使徒たちにしてみれば、勇敢に証しをしたはいいけれど、非常に危機的な状況となったのです。

その時、待った！の聲がかかります。声を上げたのは、あのガマリエル大先生。彼はすべての人に尊敬されている律法学者のパリサイ人でした。また後の 22 章 3 節から分かりますように、かつてパリサイ人であった時のパウロの先生だった人です。そのガマリエルが、この件は慎重に扱うべし、と提案します。性急に行動することは大変危険である、と。そして使徒たちを一旦議場から外に出させて、二つの事件を思い起こさせます。一つは 36 節にあるようにチウダの反乱です。これはおそらく紀元前 4 年のヘロデ王の死後に無数に起こった反乱と関係するものと思われます。彼はそれまでの支配者が亡くなって、国家体制が弱まった時期に付け込んで、「我こそ真の支配者である」と語ったのでしょう。そして多くの人が彼に引きつけられて行ったことは、当時かなりの注目を集めたものと思われます。ところがしばらくするうちに、チウダが語るころとは裏腹に、彼は殺されてしまいます。そして彼に従った多くの人たちも散らされてしまい、この時には何の跡形もない状況となっていたのです。

もう一つの事件は、37 節にあるように、ガリラヤ人ユダの反乱です。こちらは紀元 6 年の人口調査がきっかけとなって起こった事件のようです。この人口調査はローマ帝国への税金を集めることを目的としていたため、ガリラヤ人ユダは「それは神を冒瀆することである！」といかにも正当な主張を掲げて反乱を企てたのでしょう。常日頃からローマ帝国に不満を感じていた人々を巻き込んで、それはかなりの勢力となったに違いありません。しかしそのように騒がれた事件も、この時にはその影すら見当たらない状況となっていました。結局のところ、彼もチウダと同じ運命をたどったというわけです。

以上の二つの出来事を例にあげてガマリエルが言いたかったポイントが 38～39 節に示されています。「そこで今、あなたがたに申したいのです。あの人たちから手を引き、放っておきなさい。もし、その計画や行動が人から出たものならば、自滅してしまうでしょう。しかし、もし神から出たものならば、あなたがたには彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかす

れば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」ガマリエルの提案は、一言で言って、性急な判断は下さず、神の摂理の御手に委ねよう！というものです。自分たちが手を下さなくても、神がさばきを下される。ここには誤りやすい人間への不信頼、また警戒心もあったでしょう。私たちは何かを主張する歳、自分こそ正しいと思い込みますが、ガマリエルはそんな時でも、自分の方が間違っている可能性が無きにしも非ずである、と一歩引いた考えができる人でした。あやふやな人間が知ったかぶりをして神より先に判断してしまうことは、自らの命取りにもつながりかねない。だから先走ったさばきはせず、神の御手に委ね、その結果を受け入れよう！と。さすがガマリエル先生です。サドカイ人らと対照的に、どっしりと落ち着いて話すその内容には、さすがの説得力が感じられます。

さて私たちはこのガマリエルの考え方をどう見るべきでしょうか。彼の発言にはいくつかの問題があります。少なくとも次の三つは指摘できます。一つは使徒たちの活動を、先に例にあげた二つの過去の事件と同一視していることです。さらに言えば、イエス様をチウダやユダと同列に置いています。彼がすでに死んで滅びたチウダやユダを引き合いに出したのは、イエス・キリストも同じく死んだままであると考えているからです。すなわちイエス・キリストの復活を否定しています。彼は慎重な言い方をもって明言は避けていますが、イエス・キリストと弟子たちの運動を、チウダやユダの運動と同じレベルのものと見なしているのです。

二つ目の問題は、成功するか、あるいは失敗するかによって、それが神からのものかどうかを見分けられるとした点です。確かに最後の日には神の正義は実行され、悪がさばかれることを私たちは知っています。しかし短期間の観察から、それが神の御心かどうかを判断することはできません。聖書の様々なページに記されていますように、この世では悪人が栄え、善人が苦境に追いやられていることもしばしばです。一人の人が地上で生きる時間の長さ程度からは、確固たることを言うことはできません。

そして三つ目となりますが、ガマリエルの一番の問題は、真理に対して中立の立場を取ろうとしたことです。マタイ 12 章 30 節：「わたしの味方でない者はわたしに逆らう者であり、わたしとともに集めない者は散らす者です。」ガマリエルは、使徒たちに出を下すのを控えよう、と言うばかりでなく、その使徒たちのメッセージが本当に神からのものかどうか、調べ直そう！とも提案すべきでした。彼らの言っていることは真理なのか、イエスのよみがえりは事実なのか、だとしたら我々はその前でどんな態度を取るべきか。そのことをせずに、ただ神がどうするか見守ることにしよう、という傍観主義は、一見敬虔そうに聞こえますが、真理を求め、それに従おうとする真の敬虔からは程遠いものなのです。

このようにガマリエルの提案は、神の前に素晴らしいものであったわけではありませんが、神は彼の提案を用いて使徒たちを守ってくださいました。しかし使徒たちは釈放される前にむちで打たれます。これはパウロがⅡコリント 11 章 24 節で言っているような、39 のムチだったのだろうと学者たちは言います。相当残酷な鞭打ちだったに違いありません。その体にはあざができ、その背中には血がにじんだに違いありません。その上でイエスの名によって語ってはならない、と再度言い渡されます。しかし驚くべきは、その後の使徒たちの姿です。二つのことが記されています。

一つは 41 節。「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。」これは一体どういうことでしょうか。なぜ彼らはこん

な状態で喜ぶことができたのでしょう。思い出されるのはイエス様の山上の説教における次の言葉です。マタイ5章10～12節：「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」イエス様はここで前の時代の預言者たちを引き合いに出しましたが、その預言者たちに対する迫害は、究極的にはイエス様ご自身において成就しました。山上の説教を語った時点ではまだイエス様は十字架についていませんでしたからそのことは語っていませんが、迫害の頂点は何と言ってもイエス様に対するものです。つまり私たちは義のために苦しむ時、預言者たち以上に、イエス様ご自身と同じ苦しみにあずかっているのです。

私たちがこれを喜べるかどうかは、イエス様の十字架をどのように見るか、に関係します。世の人々にとって十字架はどういうものでしょうか。それは蔑みの対象であり、惨めさの最たるものであり、絶対関わり合いたくない最悪の姿です。しかし主を信じる者たちにとっては違うはずで、私たちにあってイエス様の十字架は栄光です。誇りです。いくら感謝し、賛美しても、し尽くせない神の大きな愛のみわざです。その十字架に私たちのような者が幾分かでもあずかせていただくのです！もちろん私たちの苦しみやはずかしめにはイエス様のような贖いの力はありません。しかし私たちがイエス様に従う歩みの中で苦しみや辱めを受ける時、それはイエス様につく者として、イエス様と同じしるしを頂いていることを意味するのです。これは十字架を誇りとする私たちにあっては大いなる名誉に値することなのです。

イエス様はヨハネ15章20節で言われました。「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」この世はイエス様を十字架につけ、イエス様を殺した世ですから、そのイエス様に従うなら、世から同じような扱いを受けることは避けられません。Ⅱテモテ3章12節：「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」ですから自分の生活を振り返って、そこにキリストに従うがゆえの苦難や辱めがないなら、それは私が主に忠実に歩んでいないからではないのか、と考えるみなければなりません。キリストに従う歩みにおいて苦しみや辱めは避けられないものであって、それはクリスチャンにとって勲章のようなものです。自分もまたこれを受けるにふさわしい者とされた！と言って、喜ぶべきことだと聖書は言います。私たちがこの喜びを知っているのでしょうか。

もう一つ使徒たちが示したのは、42節にあるように、イエス・キリストを宣べ伝え続ける生活です。宮や家々で、毎日、そうしたとあります。イエスの名によって二度と語ってはならないと脅されたのに、またこんなことをしたら、また捕まり、今度はいのちの保証もない状況だったのではないのでしょうか。しかし使徒たちはそんなことは全く意に介さず、みことばを宣べ伝え続けました。それは神への信頼が他のすべてに勝っていたからでしょう。目の前に立ちあがる人間は大きく見えるかもしれませんが、神は彼らよりももっと大きい方。その神に従うなら、より力のある神が一番良くしてくださいます。

また彼らがこのように歩んだのは、福音の素晴らしさに押し出されたからでしょう。イエス・キリストにおいて、私たち罪人にとって何よりも大切な罪の赦しと永遠の命が差し出されています。これに勝る知らせはありません。他に何を伝えなくても、これこそは伝えなくては

なりません。そのために死を強いられたとしても、問題ありません。なぜならそれに左右されることのない永遠の命をすでに頂いているからです。むしろそのような苦しみにあわされるなら、それは一層の栄誉を頂くこと、さらに光栄な勲章を頂くこと、とさえ彼らは考えたでしょう。

私たちはこの使徒たちの姿に照らして、自分を振り返ってどうでしょうか。私たちはカッコいいことが好きです。人から賞賛されること、ほめられること、成功者と見られること、繁栄して豊かな生活を送ることが好きです。その反対のカッコ悪いこと、苦しむこと、惨めなこと、人々から蔑まれることは嫌います。しかし主に従うためにこのような道に行くことを余儀なくされるなら、それは私たちクリスチャンにとっては非常に栄誉なことなのです。イエス様と同じような辱めを受けるに値する者とされたという、十字架を何よりも感謝し、尊ぶ私たちにとっての最高の勲章なのです。そのことを、この使徒たちの姿を通してもう一度考えさせられたい。そして主に従うために、自分にもそれが与えられるなら、喜んでその辱め、苦しみを担い、進んで行きたい。その歩みを用いて、神はこの世界に対するご自身の働きを進めてくださいます。そしてイエス様の山上の説教のお言葉通り、神はそういう者たちにやがての天で豊かに報いてくださるのです。